

「What is Your Message? Bloody Jesus in “The Passion of The Christ”」

これは、処刑されるイエスの血のりが滲み、スクリーンから血しぶきが飛んで来そうな映画である。この映画の評価を巡って米国で論争が起こるのは当然であろう。映画は、イエスがユダの密告で捕らえられる場面、福音書の最終局面から始まる。

【現代とイエスの時代との時間的、文化的隔たり】

会話に英語は一切ない。全てアラム語かラテン語だそうだ。映画の中の言語がどれほど歴史考証的に正しいのかは私は全く判らない。観客は英語の字幕で理解するしかない。しかしそのことが、イエスの時代と我々の時代がいかに時間的、文化的に隔たったものか想起させてくれる。

例えば映画 *The Last Samurai* を海外で見た日本人なら皆感じることであろうが、英語の字幕では日本語の語感が伝わらない。伝承された福音書に記された言葉さえ、実際にイエスが語った言葉（イエスキリストが実在したという前提の上であるが）から大きく変形してしまっていることは、複数の福音書が同じ場面で異なったイエスの言葉を記載していることから明らかである。しかし現代の私たちは、時間的、文化的距離の故に、英語訳にせよ日本語訳にせよ、福音書に書き残された言葉の語感さえ判らずに、とんでもない勘違いをしているかもしれないのである。映画の会話が英語でないことは、そういう事実を想起させてくれる。

【血飛沫をあげて鞭打たれるイエス】

福音書は磔（はりつけ）の前に、キリストは鞭打たれたと一行記している。Mel Gibson 監督は、この鞭打ちの刑のシーンを徹底に再現する。最初キリストは木の枝の鞭で叩かれて全身血が滲むが、その後それでは足りずに鉤づめの付いた鞭でさんざんに叩かれる。皮膚は裂け、肉が削がれ、血しぶきが飛ぶ。立っているのも困難なほどボロボロの身体になった後、処刑の丘への貼り付け用の十字架をかついで歩かされる。十字架を担いで歩く過程でも処刑執行役のローマ兵らの虐待が容赦なく続く。¹

【根本的な問い：人が人に行う残虐】

この映画に批判的な評論家は、この映画がイエスの受けた処刑過程を、ことさらにむごたらしく描いているばかりで、宗教的なメッセージ性に乏しいなどと批判している。ぼんくらな批判だ。私の考えは全く反対である。監督 Mel Gibson は、人間の人間に対するこうした残虐な営みが、なぜ生じるのか？という根本的な問いをつき付けているのである。十字架に磔になったイエスは、自分を処刑する人々に向かって祈る。主よ、お許し下さい。彼らは自分のしていることが判らないのです。」映画の中でイエスが主に許し請うた人間の罪とは、人が人に対して行う残虐である。そのことを強調

¹ 映画で描かれた鞭打ちと張り付けのシーンが残虐性を誇張しているとは歴史考証的な見地からは言えない。生きたままの釜ゆで処刑、大きな鉄板の下から火を焼き、裸で鉄板の上に置く焼き鉄板処刑、生きたまま全身の生皮を剥いで、炎天下にさらす処刑等、古今東西の人類の処刑史は想像力の限界に挑戦するような残虐性に溢れている。フランス革命の時に発明されたギロチンは被処刑者の苦痛が瞬時である点で「人道的」にすら感じる。

するために、Gibson はイエスの受けた鞭打ちと張り付けの処刑をこれでもかと言わんばかりにリアルに残虐に再現したのである。

これは極めて根本的な問題提起である。キリスト教がローマ帝国の中で国教としての地位を獲得した後、ユダヤ教の異端として断罪されたイエスの受けた虐待と同じ虐待が、今度はキリスト教会によって異端、異教と認知された人々に対して行われたことを想起しよう。キリスト教、イスラム教ともに異端、異教に対する虐待において並び競い合う。従って Gibson の問いは、人間の「原罪」に関する宗派、宗教の違いを超えた根本的な問いに発展するのである。「宗教的メッセージ」なるものが人間存在に関する根本的な問いであるならば、この映画の問いは最高度に宗教的であり、特定の教義の制約の下にある「職業的な宗教家」の手には負えないほど radical な問いである。ユダヤ教徒によるキリストへの残虐を描いているので、これは反ユダヤ映画ではないのか？などと言うのはとんでもない勘違いである。イエスを最初に信じた人々も、処刑を求めた人々もユダヤ教徒である。キリスト教はユダヤ教内部の「異端」として生まれたことをこの映画は正しく強調している。

【残虐の動機分析】

「人の人に対する残虐」、それはなぜ生まれるのか？ この回答を映画は直接的には提示しない。解答は見る側に委ねられている。「人間の残虐性→人間の罪→悔改め」という形で思考停止してしまうことは容易である。しかしそれではこの radical な問いを発した意味がない。ここからは映画の解釈ではなく、私の考えである。映画には二層の異なった残虐性が見られる。ひとつは、ユダヤ教の司祭らが見せる残虐である。自分らの宗教的な権威に挑戦し、それを否定するイエスの教えを彼らは許せない。当時の統治者であるローマの総督の前にイエスを突き出し、「自分をユダヤの王だと僭称する不逞の輩だから磔の刑にしろ」と要求する。ローマの総督は極刑に消極的である。それは彼が人道的だからではない。ローマ総督の権威・権力の基盤はユダヤ教徒内部の宗教的権威争いとは係わりがないから、不必要な極刑には消極的なだけだ。映画では総督の女房が密かにイエスの信者であることもあって、死罪にはしたくない。しかしユダヤ教徒の司祭らが強硬で、死罪を断れば暴動すら起こりかねない雰囲気を押されて処刑を命じる。

【権威・権力者の残虐動機】

ここに見る司祭らの冷酷と残虐は、理解し易い。古今東西、権力・権威の地位にある者が、それに挑戦、反逆する者全てに対して示してきた残虐である。自己の権力・権威を守るためという動機が明確である。しかも不服従、反逆するものを残虐に抑圧することで、万一自分が権力の地位から追われる時には反対勢力から残虐な報復を受けるリスクを高める。従って反対者らへの弾圧は益々過酷なものになる。このように自己強化プロセスが働くので、過酷さがエスカレートする。権力の頂点にある者だけでなく、一度権力のヒエラルヒーが形成されれば、階層の中下層の者も、不服従、反逆、異端に対して同様に過酷となる。反対者を取り締まることができなければ、自分が断罪されるからである。

【闇が深い目的のない残虐行為】

大変に判り難く、闇が深いのは、処刑を執行するローマ兵がイエスに行く虐待である。単なる刑の執行の粹を超えて、執行人達は血に酔うように残虐性をエスカレート

させ、虐待することのサディスティックな快感に酔っている。私は「人間の本性的な残虐性」などという観念論的説明は受け付けない。勿論、人間には他の動物同様、自然淘汰の中で方向付けられてきた遺伝子レベルに基礎を持つ行動類型はある。例えば自分や親近者が虐待されれば、報復心と憎悪で相手に対して残虐になる性向がある。自分が所属する血縁グループを防衛する行動様式が進化の過程で強化されて来たからである。しかしそうした報復関係が全くない無抵抗の第3者に対する虐待がエスカレートするという事態はどう理解したら良いのだろうか。また、食べるためには他の生き物を殺し、競合者を押し退けて獲物を確保しなくてはならない。従って「食べる」ためなら残虐にもなると言うのであれば理解できる。しかしそうした動機から全くはずれた状況で展開されるこの種の残虐の動機、誘引は一体何なのか？

この種の残虐は、例えば Kevin Costner 主演の “Dance With Wolves” で、主人公に対する連邦軍兵隊の虐待として登場した。南北戦争を舞台にした悲劇的なラブストーリー “Cold Mountain” では、南軍側の住民や元兵隊に対する南軍の軍人自身による虐殺行為に同じものが見られる。共通するのは行為に目的がなく、残虐行為自体を楽しんでいることである。

虐待される側に入るか、虐待する側に入るか、もし自分が両者の不安定な境界線上に身を置いているとしたらどうなるであろうか。戦場において兵士はそうした不安定な状況を経験する。敵に遭遇すれば、殺さなければ殺される。殺されずに捕獲されても虐待される。「捕虜の人権」などと言う概念のなかった時代の話である。こうした不安定で強いストレス下に置かれた人間にとって、殺されも虐待もされない状況を確認することは至福である。目の前の罪人、あるいは敵に対して、虐待することが許された、あるいは命じられた時、虐待する行為は自分が虐待される側には身を置いていないことを確認、実感する至福の行為になるのかもしれない。

【「私の国はこの世には属していない」】

イエスはローマ総督ピラトゥスの尋問で「おまえはユダヤの王なのか？」と問われて答える。私の国はこの世には属していない。」(ヨハネの福音書) これは文脈的には、イエスの信条は「天上の主」のみを根拠にしており、いかなる地上の権威・権力にも基づいていないことを意味している。さらに敷衍すればイエスの宗教はいかなる現世的な権威・権力も求めないということにならないか。しかしその後のカトリック教会はこの点でイエスと全く正反対の方向に発展した。異端、異教の弾圧は地上の権力の発動であるからだ。人が人に対し行う残虐を廃棄するために、思想、信条、宗教の自由を含む「基本的人権」の概念が提起され、定着して来た。イエスの処刑からほぼ 2000 年、あまたの残虐の繰り返しの後に西欧社会はイエスの言葉に辿り着いたのでなかろうか。我々はそれを共有する恩恵を享受している。西欧社会が宗教の政治(世俗の権力)からの分離を実現できたのは、イエスのこの言葉に思想史的な端緒があるのかもしれない。

一方、イスラム教は宗教的理念の現実世界での実現を原理的に志向しており、多くのイスラム国家では現代でもなお宗教的権威が世俗の政治を支配しているか、あるいは強い影響力を保っている。またイスラム過激派は欧米に対する「宗教・世界観闘争」を公然と掲げている。欧米とイスラム圏の文化的な対立軸を、イスラム教対キリスト教ととらえ、双方「一神教」であるから対立が熾烈になるという見解が一般にある。しかし歴史的な過去においてはともかく、現代においては見当違いな見解であろう。

双方の文化的な対立軸は、「宗教が脱政治化した結果、異宗教が共存できる文化」と「宗教が政治との一体性を維持しているため、異宗教が政治権力で排撃される文化」にあるのだと思う。

【訂正】

会報1月号に掲載した「映画 Matrix シリーズの魅力と謎」で、ラストシーンでの Neo と Smith の闘いで交わされる会話で一箇所私の聞き取り違いがあったことが、この度発売になった DVD 版（英語字幕が出る）を見て発見しました。なぜおまえはそこまで戦うんだ? という Smith の問いに対して、Neo は “Because I choose it” と答えています。私はこれを “Because of trusty” と誤ってしまいました。しかし Matrix ファンによる Web Site ではネイティブの聞き取りで、ここの台詞を “Because I am the truth.” と記録しているものがありましたので、ネイティブでも聞き取り難い個所だったようです。

以上